

教える側も教わる側も やってみたい アイスブレイク実践教本

評者・伊藤美樹子

滋賀医科大学公衆衛生看護学講座

学生・新人看護師の目の色が変わる アイスブレイク 30

著・内藤知佐子、宮下ルリ子、三科志穂／定価・本体 2200 円＋税

発行・医学書院 (03-3817-5650) / 2019 年



最近、新任期の保健師は、健康教育や資料を用いて説明するようなプレゼンが上手だという話を、とある研修会で耳にした。しかし一方で、所内の電話に出ることや家庭訪問には苦手意識があるようだとも。

つまり、発信者として一方的に伝える技術はとても器用にこなせるのに対し、携帯電話と違って相手が分からない固定電話での応対や、訪問先で相手の話を「聴く」というような、双方向のコミュニケーションはうまくないようである。

本書『アイスブレイク 30』の chapter1「主体性を引き出すアイスブレイク」を見てみよう。「2人で会話を成立させるトレーニング」「数人で会話を継続させるトレーニング」など 10 の技法が紹介されている。双方向コミュニケーションの技術の深化に役立ちそうだ。

私が興味を持ったのは、chapter3「思考力を引き出すアイスブレイク」にある「わかったつもりをなくすトレーニング」だ。二者のコミュニケーションの中に用いられる

「大丈夫」「ちゃんとする」のような、具体的ではない概念や抽象度の高い言葉でのやりとりの問題に気付くことを意図したトレーニングである。新任期のみならず、指導する側にも気付きは大いにあるだろう。他に「根拠に基づき考える力を養う」「互いの価値観を尊重する力を養う」を取り上げた「チームワークを引き出すアイスブレイク」(chapter2) など、計 30 のネタが紹介されている。

著者らは、『『教える一教わる』という上下関係ではなく、(略)フラットな関係性があるこそ、学習者の主体性は引き出され』と述べている (p.12)。面白そうだ、やりがいがありそうだ、できそうだ、やってよかった、やり続けたいという動機付けモデル (ARCS+V モデル) も経験的にそうだろうと納得できる。また本の帯にある通り、「これは**教育技法**」なのである。いろいろと応用できそうだ。

アイスブレイクでは「いかに自己開示ができるか」「自由に発想して

もらうか」が重要であり、参加者全員にとって安全な（自由が脅かされない）場にすることが大事だとの解説もある (p.15)。私がアイスブレイクと呼んできたものには、睡魔に襲われて意識が遠のいた学生をやんわり目覚めさせたり、難しい内容が続いて集中力が途切れてきた聴衆を喚起するために、脈絡のない風景写真や愛犬の写真を提示したりするものもあるが、そうした間を持たすものとは区別して読んだ方が良い。

本書はアイスブレイクの実践教本として、時間配分や投げかけの言葉まで具体的に紹介している。ただし、アイスブレイクをするファシリテーター側に成功を確約してはいない（それも好感が持てる）。うまくいかない場合にありがちなことや、次に生かすための対応策についても触れている。その点が重要だ。

学生や新人看護師を想定して書かれているが、広く住民にも、そして保健師の技術向上にも一役買うであろう。